



大同学園創立70周年記念事業

学生の居場所空間 「ゴビーステージ」、完成!

学生の要望がカタチに。ゴビーステージが同窓会の寄付を受け、11月9日(火)完成しました。

当日の竣工式では、奥村博司理事長から、宮本一男同窓会長に感謝状が贈られました。

学生のキャンパス生活を盛り上げる空間として活用されることを期待して、オープニングセレモニーを開催。

初日(9日)は、吹奏楽団の演奏会。10日(水)は、音楽研究部のライブ。11日(木)は、ストリートダンス研究会のダンスパフォーマンス。12日(金)は、「地裏里(ちばり)ジャンクション」のプロコンサートを実施。

500人を超える学生たちが参加、ともに完成を喜びました。



No.73 2010.12 DAIDO CAMPUS

02 学生の勇姿 04 学科・専攻、研究室ニュース 10 トコトン先生大活躍
15 やるじゃんトピックス!!/人事 16 大同学園創立70周年記念事業



写真提供:アルバム委員会



学生会執行委員会主催 体 育 祭

10月15日(金)・16日(土)の2日間にわたって、今年度も体育祭が開催されました。今年度は両日も天気にも恵まれ、15日には、サッカー、バドミントンが行われ、16日にはソフトボール、バスケットボールが行われました。メイン競技以外にも、観戦者が自由に参加できる飛び入り企画が催され、2日間にわたって500人を越える学

生が参加(昨年度はおよそ400人)し、それぞれが楽しい思い出を作ったことだと思います。

競技に真剣に打ち込む学生は、普段の生活とは一味違って一段と活気が溢れ、素晴らしい大会になったと思います。



クラブ委員会主催 レガッタ大会

11月7日(日)庄内川ボートコースにおいて、第47回錦杯学内レガッタ大会が開催されました。早朝の冷え込んだ中、クラブの部が24チーム120人、一般の部が9チーム45人の計165人が競技に参加しました。現役の大同生をはじめ教職員、そしてOB・OGまで幅広い年齢層の中、優勝目指して各チームが精一杯ボートを漕ぎました。

今年度は、昨年度課題であった各チーム

の練習不足を軽減するため、大会前の練習日数を増やし、よりスムーズかつレベルの高い大会を目指した、クラブ委員会の努力がありました。

例年に増してゴール直前まで接戦を繰り広げるレースが多く、とても白熱したレガッタ大会となりました。

昨年度は昼過ぎに雨が降ってきたため、決勝を執り行うことができませんでしたが、今年は晴天に恵まれ、クラブの部では、音楽研究部が、昨

年度、最速タイムで優勝したモータサイクルスポーツ部を見事下しました。また一般の部では、山田錦が連覇を達成しました。

なお、当日は事故・けが等なく無事終了したことを添えておきます。



西堀賢司研究室(工学部 総合機械工学科 ロボティクス専攻)・ロボット研究部 刈谷産業まつりでロボットの展示・実演

11月6日(土)、西堀研究室とロボット研究部は刈谷市産業振興センターで開催された「刈谷産業まつり2010」(主催:刈谷市、刈谷商工会議所)に参加し、ロボットの展示・実演を行いました。

今回は市制60周年記念にあたり、愛知県次世代ロボット市場化支援事業「あいちROBO応援キャラバン」からの要請により出展しました。特設

ステージでは、本学が製作した8台の小型二足歩行ロボットによる「ロボットバトル」を、トーナメント形式で午前と午後の2回に分けて開催しました。

また、あいおいホールの2階では空中ブランコロボットと小型二足歩行ロボットの操縦体験ブースを出店しました。当日は天気も良く、64企業の出展ブースが大変な賑わいを見せていました。



▲ロボットバトルの様子

黒野領太さん・稲山圭太さん(工学部 建築学科4年) 「開府500年のまちの姿懇談会」で名古屋市長賞を受賞

10月31日(日)、名古屋都市センターで「第6回開府500年のまちの姿懇談会」が開かれ、黒野さんと稲山さんの参加したグループが「名古屋市長賞」を受賞しました。

この会は、2010年に名古屋開府400年を迎えた記念事業の一環として、開府500年(100年後)の名古屋のまちの姿について提案・議論するもの。今回は、地元の大学で建築を学ぶ学生ら28人が集まり、5グループに分かれ、5月からワークショップを重ねてまとめた「まちづくりの案」を発表しました。

「市長賞」を受賞した黒野さんらのチームは「超コンパクトライフ名古屋」と題し、半径1kmで暮らしが完成する街を提案。区画ごとに住民が交流す

る空間を設け、各空間に芸術やスポーツなどの特徴を持たせることで人が行き交うように工夫されています。

また、入波平さやかさんと渋谷遼さん(大学院工学研究科 修士課程 建築学専攻2年)が参加したグループは「名古屋の未来賞」に輝きました。



▲黒野さん(左)と河村たかし名古屋市長



平松都利さん(大学院 工学研究科 修士課程 都市環境デザイン学専攻2年) 「環境デーなごや」と「COP10生物多様性交流フェア」から学んだこと

私は学部1年生の時から、毎年9月に開催される環境デーなごやに参加しています。ブースでは主に都市環境デザイン学科の紹介とペットボトルを使ったフラワーペットボトルの作成を行いました。また10月に名古屋で開催されたCOP10フェアにもアシスタントとして参加しました。

環境デーもCOP10も会場はとても多くの人たちで賑わいました。展示物や説明に対しての質問が多く、人手が足りない時もありました。保育園くらいの子どもから、おじいさん、おばあさんまで、幅広い世代の人たちが会場に来ます。環境デーでは学科や研究の紹介、COP10では学生環境サミットや北海道クッチャロ湖の紹介をしましたが、これほど説明するのに苦労したことはありませんでした。特に、COP10では世界各国の人たちが来たので、ジェスチャーを交えた慣れない英会話で説明しました。

説明というと簡単に聞こえますが、学会などで研究発表を行う場合、聞いている人たちは、

その専門分野の知識があります。しかし、環境デーやCOP10などに来られる人たちの多くは、研究のことなどに関しては全くの素人です。どう伝えれば相手に理解してもらえるのか?それに、興味がなさそうな人に興味を持たせるにはどうすれば良いのか?会場に来た人に、ただ説明をするのではなく、話す相手のことを考え、内容を工夫しながら説明すると、一生懸命さも伝わりますし、話す相手の自分に対する印象や興味の持ち具合、説明の理解度も変わります。そして、なにより自分も得られる物が多くなります。



▲環境デーなごや(平松さん)

よく指導教員の大東憲二教授が「市民の人たちや外部の人たちと交流する場は設けますが、その後の行動についてどうするかは学生自身が決めること」と言いますが、その通りだと思います。自分から行動を起こせば、何か小さなことでも得られることはあります。しかし、行動を起こさなければ何も変わらないし、自分のプラスになることは得られません。

「自分のために、自分から行動を起こす」この言葉を常に意識しながら、残りの学生生活を過ごしたいと思います。



▲COP10フェア(Brazilの取材クルーを応対した垣本祐典さん(大学院2年)。後日、Blogに名前が掲載されました。)



工学部 機械工学科・総合機械工学科

アーヘン工科大学(ドイツ)と 共同ワークショップを開催

10月14日(木)、15日(金)にドイツのアーヘン工科大学(正式名:RWTH Aachen University)で、本学との共同ワークショップ(講演会)が開催されました。これは本学の提携校であるアーヘン工科大学との学術交流として2年前に開催された塑性加工分野のワークショップに続くもので、本学からは土田豊教授(機械工学科)、小森和武教授(総合機械工学科 機械システム専攻)のほか、ロボット分野も加わり、西堀賢司教授(総合機械工学科 ロボティクス専攻)、山田喜一教授(機械システム専攻)が参加しました。

大竹さん、小出さんは2足歩行ロボットの競技会「ロボファイト」の2008、2009年優勝経験者であり、自作した4台のロボットを持ち込み、英語によるプレゼンテーションと実演を行いました。空港の手荷物検査でロボットがチェックされ、説明を求められたことがあったが、無事役目を果たすことができました。



▲プレゼンしている大竹さん(右)と小出さん(左)



▲質問に答える西堀教授(左)

ドイツではこのようなロボットバトルは珍しく、ワークショップ参加者から「いくらで作れるか」といった質問が出ていました。今回ふたりは初めてのヨーロッパ。中世の雰囲気を残すアーヘンの街並みに感激していました。

工学部 機械工学科・総合機械工学科 ロボティクス専攻

日本ロボット学会の一般公開イベントに出展

9月23日(祝・木)に名古屋工業大学で、第28回日本ロボット学会学術講演会の一般公開イベント「陸海空おもしろロボット大集合」が開催されました。

体育館の会場では、西堀賢司研究室(ロボティクス専攻)が空中ブランコロボットと2足歩行ロボットを、プールでは橋口宏衛研究室(ロボティクス専攻)が水中ロボット「ゲンゴロウ」を展示・実演しました。



▲恐竜ロボット工作教室

また、8月末に行われた堀川エコロボットコンテストで愛知県知事賞を受賞した水上バイクロボット「あめんぼ」(名南機械製作所と共同開発)もコンテスト優秀作品として実演しました。

雨の止んだ合間に学生が子供たちを順番に膝に乗せてプール上を一周すると、次から次へと希望者が並び、人気を集めていました。

西堀教授が講師を務めた恐竜ロボット工作教室も、開場直後に午前と午後の2回が予約で満員(70人)となる盛況でした。当日はあいにく雨が降ったり止んだりの日でしたが、4,500人を超える入場者がありました。



▲水上バイクロボット「あめんぼ」の実演

約で満員(70人)となる盛況でした。当日はあいにく雨が降ったり止んだりの日でしたが、4,500人を超える入場者がありました。



▲2足歩行ロボットと空中ブランコロボットの体験

工学部 総合機械工学科 ロボティクス専攻

柴田小学校2年生「町たんけん」 江南市立西部中学校1年生 校外学習

10月1日(金)、柴田小学校2年生の児童が生活科の授業「町たんけん」で本学を訪れました。「おはようございます!」の元気な挨拶から始まり、学内を歩きながらS棟へ。ロボット工房では、二足歩行ロボットの操縦で大盛り上がりし、4階の産業用ロボット見学では「すごい」と歓声を上げていました。普段とは違った小さなお客様に、産業用ロボットの資料も全てひらがな質問タイムでは、「大学は何階建て?」「遊ぶところはあるの?」などかわいらしい質問も飛び交い、元気いっぱいの見学会となりました。

10月21日(木)には江南市立西部中学校1年生が大学見学に訪れ、ロボット工房や産業用ロボットを見学しました。後日届いた生徒たちの感想文には、「目があるロボットは、赤外線で物を確認して勝手に動くのすごーいと思いました」など、「目のあるロボット」への驚きが多く見られました。また、「将来、自動で動く車が当たり前のように走ようになるのかな、と思うとすごく楽しみです」「いつか人間のように視覚があって、知能があるロボットを作りたい」と夢も膨らんだようです。



▲溝口正信教授(右)



▲西堀賢司教授(右)



工学部 都市環境デザイン学科

社団法人 愛知県測量設計業協会との意見交換会

9月16日(木)、本学A棟14階交流室で「愛知県測量設計業協会との意見交換会」が開かれました。出席者は、本学が学科長の大東憲二教授、堀内将人教授、嶋田喜昭准教授の3人、社団法人愛知県測量設計業協会が、会長はじめ16人。

近年、測量設計業界では、就業者の高齢化と若年技術者の減少が問題となっている。一方、大学生の就職難も問題となっており、人材確保の観点から業界と教育機関との相互理解を深

めるための意見交換がなされました。

まず、本学と業界側からそれぞれの現状の説明があり、その後、最近の学生の気質や、お互いが要望することなどに関して、フリートークがなされました。業界が求める人材は、元気がある人、社会経済に明るい人、そして、昨今では特に、マネジメント能力のある人とのことでした。

なお、この様子は協会が発行している「方位(2010-10 第33号)」に掲載されました。



▲中央から、大東教授、堀内教授、嶋田准教授

情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻2年

映像コンテストにエントリー、メーテレから取材を受けました。

石原ひとみさん(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻2年)をリーダーに坂本健太郎さん・正木洋太さん・水谷桂輔さん・平松健太郎さんのグループが、映像コンテスト「みんなをハッピーに!Vドリームプロジェクト」にチャレンジしました。このコンテストは全国のU-23(23歳以下)を対象としたもので、3分以内の「○○でハッピー!」な映像を募集、その中から大賞を決定する。

10月18日(月)、石原さんたちが、そのコンテストにエントリーする映像を制作する現場にテレビ取

材(名古屋テレビ映像)が入りました。

彼女・彼らのチームは、テーマ「お箸がきらいに割れてハッピー」や「茶柱が立ってハッピー」などを、制作。なかなか立たない茶柱に悪戦苦闘、3分間の映像に5時間以上…、撮影を続けていました。

また、自分たちが考えたハッピーだけではなく、本学の学生に「ハッピーなときは?」などリサーチ、撮影していました。

この模様は、地方選考会の様子として、12月にメーテレで放送されました。



▲「茶柱が立ってハッピー」を撮影するメンバーたち

井上孝司研究室(大学院 工学研究科 修士課程 機械工学専攻/工学部 機械工学科) 井戸恒喜さん(大学院2年)

国際会議(アイルランド)で講演

9月22日(水)から24日(金)、アイルランド国ダブリン市にあるDublin City Universityで開催された「Workshop & International Conference on Smart Materials 2010」に井戸さんが「CUTTING CHARACTERISTICS OF THE 63.5 FE-36.5 NI HIGH TEMPERATURE ALLOY IN END-FACE DRY MILLING」と題して、大学院での研究成果を英語にて講演発表を行い、その後の質疑にも適切な対応を行っていました。

当日の発表会場は講義室でやや小さめでしたが、満席状態。40人程度、外国の若手研究者たちを集め、行われました。自らの講演後は他の講演にも出席し、積極的に交流を行うなど、充実した国際会議になったようです。

「大学院1年生時に国際学会を聴講する機会があり、国内学会との規模の違いに衝撃を受け、今回の国際学会参加に相当のプレッシャーを感じてい

た。発表準備では技術英語の独特な言い回しやプレゼンスタイルなど分からないことばかりで、井上教授をはじめ、学習支援センターの大嶋先生など、多くの方に力添えをいただいた。また院生室のメンバーは、同時期に自身の発表が控えているにもかかわらず協力してくれた。おかげで本番は気持ちにゆとりをもちながら発表をすることができた。学会期間中は、簡単な単語でもいいので積極的に会話することがとても重要であると分かった。学会発表の経験を就職後も生かすとともに、英語力の上達を目指したい。」と井戸さんは話しました。

この会議への参加者はアイルランドを始め英国、ルーマニア、シリア、エジプト、マレーシア、香港、アルジェリアなどからの研究者たちでした。



▲井上教授(左から2人目)、井戸さん(右)



▲プレゼンしている井戸さん



小林正典研究室(大学院 工学研究科 修士課程 機械工学専攻/工学部 総合機械工学科 機械システム専攻)

「第37回 日本臨床バイオメカニクス学会」で発表

○会場/ 国立京都国際会館 ○日時/ 2010年11月1日(月)～2日(火)

発表テーマ

近藤政芳(大学院2年)
「ポリエチレングリコールを用いた人工潤滑剤の開発(基礎的トライボロジーの評価)」
秦 陽介(大学院2年)
「高速度カメラを用いた衝撃荷重時における軟部組織の粘弾性特性の観察」
向 創(大学院1年)
「疑似体液中でのハイドロキシアパタイト($\text{Ca}_{10}(\text{PO}_4)_6(\text{OH})_2$)表面の骨伝導性における低出力超音波パルス照射の影響」
清水勇樹(大学院1年)
「形状記憶合金を用いた転倒予防用装具の作製と評価」
本田佳之(大学院1年)
「ポリエチレングリコールを用いた人工関節潤滑剤の開発(臨床応用における基礎研究)」

小林研究室では毎年「日本臨床バイオメカニクス学会」で発表しています。大学院1年生にとって学会発表は初めての経験で不安でいっぱいでした。試験機や実験器具の故障などのトラブルに見舞われ、データ収集に手こずってしまい思うように捗らなかったのですが、小林教授や先

輩方からアドバイスをいただき発表資料を完成させ無事学会発表に臨むことができました。初の学会発表では、質疑応答にうまく答えることができず自分の無力さを痛感しました。また他の発表者とpower pointの出来に差があったため、見やすく分かりやすいものを目指したいで



▲左から清水さん、近藤さん、秦さん、向さん、本田さん

す。次は国際学会を控えているため今回のようにならないよう肝に銘じ万全の準備をして学会発表に臨み、リベンジしたいと思っています。また次は、英語で伝えなければいけないのでコミュニケーションがとれるように英語力も身につけたいと思います。(本田佳之さん 記)

佐藤義久研究室(大学院 工学研究科 修士課程 電気・電子工学専攻/工学部 電気電子工学科)

中部地区最大級 異業種交流展示会「メッセナゴヤ2010」に参加

10月27日(水)から10月30日(土)までの4日間、ポートメッセなごやで開催されたメッセナゴヤ 2010に佐藤研究室が参加し、キャンパスベンチャーグランプリ中部のブースに昨年度特別賞を受賞した小型風力発電システムを出展しました。

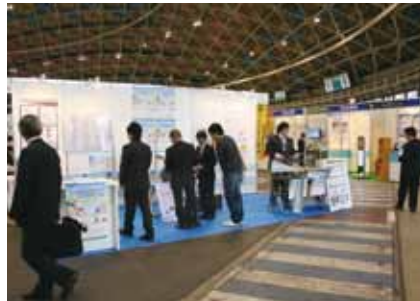
メッセナゴヤ 2010 は生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の連携事業として、「環境・エネルギー ～持続可能な社会に向けて～」をテーマに開催され、450社の企業等が出展・参加。4日間で国内外からおよそ43,000人の来場者を集めました。

今回佐藤研究室は前回特別賞を受賞した作品をさらに改良した小型風力発電システムを展示。ブースで案内役を務めた学生たちは、100人を越えるさまざまな国、そして業種の人たちと情報や意



▲説明している河内将成さん(大学院2年)

見を交換するなどコミュニケーションをとることができました。(大学院2年 吉嶺和哉さん 記)

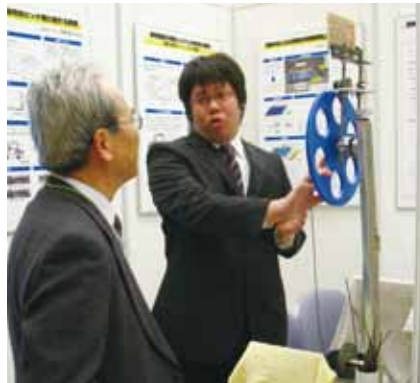


「フロンティア21エレクトロニクスショー2010」に参加

11月11日(木)、12日(金)の2日間、名古屋国際会議場で開催された「フロンティア21エレクトロニクスショー2010」に佐藤研究室が参加しました。ブースには研究を行っている風力発電や太陽光発電、さらには形状記憶合金を用いた新発電システムのパネルと実験装置の展示を行いました。

ブースには企業や学校関係者など、幅広い分野の方にお越しいただき、参考になるご意見を頂戴するなど、情報交換ができました。その中でも形状記憶合金を用いた新発電システム実験装置の展示は、多くの来場者を驚かせるなど、たいへん注目を集めていました。

また、読書新聞など、マスメディアからも興味を持っていただき、取材を受けました。(大学院2年 吉嶺和哉さん 記)



▲説明している吉嶺さん

情報学部 情報デザイン学科 プロダクトデザイン専攻

NAGOYA DESIGN WEEK 2010に参加

中部を代表するメーカーやインテリアショップを中心に、中部地区のデザインやモノづくりを文化として捉え、地域文化の活性化を目的とするイベント「NAGOYA DESIGN WEEK」。

今年は10月9日(土)から24日(日)まで開催されました。

そのイベントで井藤隆志准教授および「CAD製図応用II」の履修生が、市内家具メーカーのシ

ョールームに「コンピュータで作った木のスプーン展」を出展。授業で制作した「木のスプーン」を展示しました。

学生が3DCADから制作した個性あふれるスプーンのRP(Rapid Prototyping)モデルが話題となり、多くの来場者で賑わいました。また、本授業の過程もRolandDG社のHPで紹介されるなど話題となりました。

http://www.rolanddg.co.jp/3d_education/example/daido_product.html



大東憲三研究室(大学院 工学研究科 修士課程 都市環境デザイン学専攻/工学部 都市環境デザイン学科)

堀川エコロボットコンテスト2010で名古屋堀川ライオンズクラブ会長賞を受賞

8月29日(日)に開催された堀川エコロボットコンテストに今年も、大東研究室が参加。

今年のチーム「大同大学 CEED-DAITO」は、DOメーターで水質調査をする、まきわら舟型ロボット「ウォーターエコ5号」でエントリー。このロボットは、DO値(溶存酸素)を測定する舟で、DOメーターで測定した数値を提灯の色で範囲分けをして、水質の良し悪しを識別します。スタイルは夏の風物詩「まきわら舟」をモチーフにしました。

メンバーは、平松都利さん(大学院2年)・垣本祐典さん(大学院2年)・三浦雅也さん(4年)・見田圭司さん(4年)・長田水樹さん(4年)・細川聖馬さん(4年)。彼らは「名古屋堀川ライオン

ズクラブ会長賞」を受賞。「夢と希望にあふれるエコロボットで参加し、多くの感動をあたえてくれた。これはものづくりの技術とエコロジーの心で挑戦する堀川浄化の未来に大きく貢献するものである」と称えられた。



大学院 情報学研究科 修士課程 情報学専攻 情報デザインコース/情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻

中日新聞に研究「老人ホームの運営に役に立つ ユビキタス技術の活用」が大きく掲載

北名古屋市片場の老人ホーム「水車の森」で、入居者らの動きを把握し、パソコンで管理するシステムの実用化実験に取り組む、高木研究室の学生の姿が12月3日(金)、中日新聞で紹介されました。

この取り組みは、PCで快適な社会づくりを目指す「ユビキタス技術」に精通した人材を育てようと、全国中小企業団体中央会の協力を受け、高度ものづくり人材育成事業の一環として実施されているもので、椋山女学園大と中京大も参加しています。

実験は11月30日(火)から12月7日(火)まで実施。入居者3人とスタッフ13人に電子タグ(縦5cm、横3cm)を持ち歩いてもらい、ホームの各階4カ所に設置した読み取り機で通過時間を記憶する仕組みで、入居者が外出

したり、スタッフが階を移動したりすると、ホーム内のPCや学生の携帯電話に記録が送られ、確認ができます。

紙面には、西垣厚輝さん(大学院1年)と服部智貴さん(4年)のコメント・写真が掲載されました。

高木基充教授は「通過記録を確認することで、入居者の動きがリアルタイムに把握できるため、対処の迅速化ができ、ホーム管理者の負担軽減が図れる。また参加した学生には高齢化問題へのユビキタス技術の有用性と可能性を感じてもらいたい」と期待しています。

また、この研究は、11月30日(火)の日刊工業新聞でも紹介されました。





宇野亨研究室(工学部 建築学科)

ギフレクに参加して、学んだこと

10月30日(土)・31日(日)の2日間、ギフレクが開催されました。

ギフレクとは岐阜の有名な人が集まり展示やワークショップを行うイベントです。私の指導教員の宇野さんも岐阜生まれの有名な一人です。私たちは宇野さんを筆頭に宇野研究室の学生20人でギフレクに参加しました。

私たちは「子どもたちがかんがえるみらいのまち」をテーマに「けんちくらいぶ」を行いました。けんちくらいぶとは子どもたちがお客さまとなり、まず用意された敷地を選んでもらいます。そして建てたい家について打ち合わせをしたうえで、その場で同じ模型を2つ作り、1つは子どもたちにプレゼントし、もう1つは、岐阜の未来の街を作っていくというコンセプトに基づき展示する企画です。

子どもたちにその場で模型をプレゼントすることがこの企画の目玉のため、私たちは2人1組のパディを作り、子どもたちに対応していく事を考えました。全体のチームワークを大切にしなければならぬことはもちろんのこと、パディとの信頼関係が何よりも大切になってきました。私たちは子どもたちがどんな提案してくるのか、素早く模型を作る事ができるのだろうか、期待と不安を抱え



▲宇野教授

ながら模型づくりの練習を重ねました。

企画当初から「けんちくらいぶは、マラソンだよ」とよく宇野さんが口にしていました。止まる事無く模型を作ることになり、終わりに頃は宇野さんも学生もクタクタに疲れているだろうと想像し、覚悟を決めました。

当日、私は藤澤君とパディを組み模型を作っていました。私たちが担当したのは、「星の家」でした。お客さまは「とにかく星がたくさん」という要望でした。藤澤君と意見を出し合い、カタチを決め製作にうつります。子どもたちは作業机の前に座り、模型ができて上がるのを楽しみに待っています。子どもたちとお話をしたり、色塗りを手伝ったりしてもらい、子どもやお母さんもお互い模型を作っていました。他にも次々とおもしろい家の契約書が入ってきました。アンパンマンの家、100階建てのビル、歩き出しそうな家、アリスの住むお城、ハートがいっぱいの家、ポケモンの家など。

今回の企画で私が一番大変だったと思う事は、材料がないという事です。普段は作る物を決め材料を用意するのですが、けんちくらいぶは、作る物がわからないため材料を用意する事ができませんでした。プランコを作るのにも、材料がなく、朝、コンビニで買ったお菓子箱の厚紙を利用したりと



▲早川さん



必死に材料を探したのを覚えています。2日目には宇野研究室のOBや、ギフレクに参加している建築学生も参加していただきました。けんちくらいぶも終わりに近づき、最後の契約書の内容は、「ネコが100匹いる家」。最後なのでみんなでネコの模型を作りました。もちろんお客さまと一緒に。各々個性溢れるネコたちができ、それを模型に並べ、完成。お客さまと一緒に私たちも喜びました。

けんちくらいぶを終えて、予想通りクタクタに疲れましたが、疲労感よりも、満足感の方が勝り、楽しかったと心からそう思いました。けんちくらいぶを通して改めてモノ作りの楽しさを実感しました。一生懸命に作った模型を手に取り、喜ぶ子どもたちの姿に癒され、ありがたうや、すごいという言葉に励まされました。材料が無くなつて、工夫をして作ればこんなにも喜んでくれる人がいる。モノ作りに必要なことはこだわった物よりも相手の気持ちに一生懸命に応えるって事が本当に大切だと思いました。

最後に、ギフレクの関係者様、けんちくらいぶを考案してくださった宇野教授、とてもおもしろいワークショップを企画していただき、ありがとうございました。けんちくらいぶに携わった研究室のみんな、お疲れさまでした。けんちくらいぶで学んだ、模型を考える瞬発力、段取り、チームワーク、モノを作る心を忘れずに卒業制作に活かしていきたいと思います。

(4年 早川貴大さん 記)

高木基充研究室 / 渡部裕子研究室 (情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

第19回SAVE MEポスター展に作品出展

グラフィックデザインを学ぶ中部の大学・短大・専門学校生たちのポスター展「第19回 SAVE MEポスター展」が10月20日(水)から25日(月)、国際デザインセンターのデザインギャラリーで開かれ、高木研究室と渡部研究室の学生選抜により選ばれた10人の学生たちが出展しました。

この展覧会は、地球環境の保全・絶滅寸前の動物たちを守りたいという想いをポスターにして訴え続けてきたもの。学生たち一人ひとり、デザインの中にそれぞれのメッセージを強く込め、今考えなければならないことをカタチにしました。



▲会場の設営を行う学生たち



高木基充研究室

(大学院 情報学研究科 修士課程 情報学専攻 情報デザインコース / 情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

愛知県印刷工業組合主催 第1回ポスターグランプリで5人、入選

愛知県印刷工業組合主催第1回ポスターグランプリで高木研究室の学生、永田拓也さん(4年)、一ツ松昌慎さん(4年)、林和美さん(4年)、

西垣厚輝さん(大学院1年)、野村剛史さん(大学院2年)の5人が見事入選しました。

このポスターグランプリは COP10 の開催に協



▲林さん



▲一ツ松さん



▲永田さん



▲西垣さん



▲野村さん

杉本幸雄研究室(情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

株式会社 ワントゥワンと共同で Ustream(ユーストリーム)の試験放送を実施

11月23日(火)、杉本研究室の土屋貴義さん(4年)、鳥居拓也さん(4年)、福井通生さん(4年)の3人と名古屋の広告代理店「株式会社ワントゥワン」とが共同で、Ustreamによるライブ(試験)放送を行いました。

ライブ放送の舞台は名古屋市西区の平田学校体育センター。

第32回愛知県U-11サッカー新人大会「愛知FC 対 OWLET」の試合模様を午前10時のキックオフよりライブ放送しました。

カメラマンは土屋さん、実況を福井さん、制作と技術サポートを鳥居さんが担当。子どもたちのハツラツとしたプレイを多くの人たちに届けることができました。



佐藤義久研究室(工学部 電気電子工学科)

日刊産業新聞に 「形状記憶合金で発電」と掲載される

11月25日(木)、日刊産業新聞に「大同大学佐藤研究室・形状記憶合金で発電」と大きく掲載されました。

記事には、形状記憶合金の特性を利用した発電システムの研究のほか、27年間の(株)東芝勤務

時代の開発業務から本学での研究に至るまで、また大同特殊鋼(株)との共同研究や、さらにはこれまでの研究の集大成となる論文「形状記憶合金エンジンの出力に関する研究」についてなど、佐藤教授のさまざまな活躍が掲載されました。



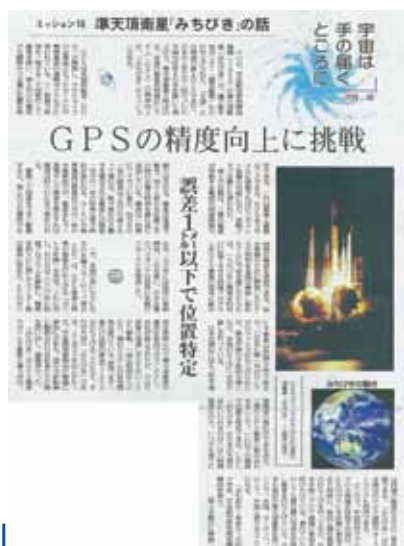
トコトン先生
大活躍！澤岡 昭 学長
中日新聞連載
「宇宙は手の届くところに」

国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」の利用計画に30年前から携わっている澤岡学長が、宇宙開発にかかわる夢のある話や星空に情熱を掲げた人たちのエピソードをつづる「宇宙は手の届くところに」が、昨年6月より中日新聞で連載されています。

9月23日(木)
ミッション16『準天頂衛星「みちびき」の話』

ドライブの必需品であるカーナビや携帯電話の道順ガイドなどに使われている、衛星利用測位システム(GPS)について紹介しています。

GPSは米国防総省が開発し、12時間で地球を一周する24基の人工衛星を使い、地上のどの場所でも瞬時かつ正確に位置を特定することができます。日本も、GPSの機能に加え、放送・通信を同時に行う準天頂衛星を研究開発中。採算の見通しが立たず苦戦しつつも、まずは1基、9月に国の資金でJAXAから打ち上げることができた「みちびき」の話や、ヨーロッパ連合(EU)で進められている、GPSと同等の衛星を打ち上げる「ガリレオ計画」の話などを伝えています。

11月25日(木)
ミッション18「心のつながりの話」

10月に無事生還したチリ北部の鉱山落盤事故を話題に、不安と孤独の中で大切な“家族とのコミュニケーション”について紹介しています。

鉱山落盤事故で坑道に閉じ込められ、いつ脱出できるのか先の見えない状況での作業員たちの不安は想像を絶する大きさ。そこでチリ当局は、米航空宇宙局(NASA)に宇宙ステーション長期滞在の専門家派遣を要請したそうです。

NASAからのアドバイスを受け実施したのが、家族からの手紙とテレビ電話。それらは作業員たちを大いに勇気づける結果に。実際、宇宙飛行士が宇宙で長期滞在する時にも、飛行士の家族のもとには特別回線のテレビ電話を設置するなどしているそうで、“家族とのコミュニケーション”の大切さにまつわるエピソードなどを伝えています。

連載は、毎月第4木曜日に掲載されています。どうぞ、ご覧ください♪

小惑星探査機「はやぶさ」の講演で、引っ張りだこ

小惑星探査機「はやぶさ」が7年ぶりに地球に帰還。小惑星「イトカワ」から持ち帰った微粒子が発見され、太陽系誕生の手がかりに繋がる快挙と大きく報じられました。

15年前、宇宙科学研究所併任教授時代にプロジェクト審査に参加し、それ以来、舞台裏から「はやぶさ」を見守り続けてきた澤岡学長が、8月以来、多くの講演や取材依頼を受けています。

- 8月 5日(木) 「夢のたまご塾」飛騨アカデミー開校記念講演
- 8月19日(木) 県内企業の中核を担う人材を育てる「賢材塾」(岐阜県技術経営塾長として)
- 10月20日(水) TECH Biz記念講演会(名古屋市長見本市委員会 企画アドバイザー委員として)
- 10月25日(月) 富山市立芝園中学校同窓会60周年記念講演
- 11月17日(水) TBS「ひるおび」
- 11月19日(金) 愛知県立安城南高等学校文化講演会



▲安城南高等学校文化講演会

10月28日(木)
ミッション17
『水ロケットの話』

今や世界大会まで開かれている“水ロケット”について紹介しています。

ペットボトルに水を入れてノズルをつけ、自転車の空気入れを使って圧縮空気を入れる。空気入れとノズルの接続部を外すと水が勢いよく噴き出し、反動でボトルが飛び出す“水ロケット”。40年前、アメリカの航空宇宙局のエンジニアが趣味で製作したことは有名で、燃料を燃やしてガスを噴出させ、その反動で飛行する宇宙ロケットと原理は同じだそうです。今回はその水ロケットの大会にまつわる話や水ロケットの奥深さなどを伝えています。

昨年に引き続き、日本放送文化大賞(ラジオ部門)の
審査委員長を務めました

11月5日(金)、ウェスティンナゴヤキャッスルで「第6回日本放送文化大賞」の発表があり、昨年に引き続き、ラジオ部門の審査委員長を務めた澤岡学長が、表彰式のプレゼンターも担当しました。

この日本放送文化大賞は日本民間放送連盟(民放連)が、会員各社によって質の高い番組がより多く制作・放送されることを促すことを目的に、平成17年に制定されたものです。“視聴者・聴取者の期待に応えるとともに、放送文化の向上に寄与した”と評価される番組を顕彰し、ラジオ、テレビそれぞれにグランプリ1番組、準グランプリ1番組が選定されます。

今年も民放各社から参加のあった番組を対象に、全国7地区で地区審査が行われ、中央審査に進んだ7番組から、グランプリおよび準グランプリが決定しました。

番組のジャンルは問わず、すべての番組を候補として審査を実施すること、グランプリ、準グランプリ受賞番組については、多くの皆さんに視聴・聴取していただくために、原則として表彰から3ヵ月以内に全国放送を行うことが、この賞の大きな特徴です。



▲テレビ部門グランプリ(報奨金1,000万円)を受賞したBSジャパンに賞杯を授与する澤岡学長

田中秀和 教授(情報学部 情報システム学科 コンピュータサイエンス専攻)
「岐阜県技術士会 平成22年11月例会」で講演

11月6日(土)、岐阜市生涯学習拠点施設「ハートフルスクエアG」で開かれた「岐阜県技術士会 平成22年11月例会」で田中教授が講演しました。

今回の例会は、会員講演と来賓講演の2本立てとなっており、岐阜県技術士会の代表幹事も務める田中教授は、「プロフェッションと倫

理綱領を考える」と題し、技術者倫理について会員講演をしました。また、来賓講演では岐阜県地方裁判所からの出席講座で「裁判員制度のしくみ」について講演が行われました。

堀美知郎 教授(工学部 機械工学科)
愛知県立一宮高等学校で講演(スーパーサイエンスハイスクール)

11月2日(火)、愛知県立一宮高等学校のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の一環として燃料電池についての講演を行いました。

SSHは、文部科学省が指定した高等学校で、未来を担う科学技術系人材を育てることをねらいとして、理数系教育の充実をはかる取り組みです。

愛知県の公立高校では、一宮高等学校、岡崎高等学校、時習館高等学校が指定されています。

一宮高等学校でも、毎年数人の大学教員や各界で活躍しておられる方が講演を行っています。東海地方のノーベル賞受賞者も講演を行ったりもしています。

堀教授は「燃料電池がつくる新しい社会とその展望について」と題して講演を行いました。理系進学希望者5クラス、200人の学生が出席。女子生徒も講演中、熱心に聴講し、講演会終了後はたくさんの質問がありました。



トコトン先生
大活躍！

佐藤義久 教授（工学部 電気電子工学科）
山内五郎 教授（情報学部 情報デザイン学科）

「第3回 東海ニューテクノフォーラム」で
研究シーズを発表

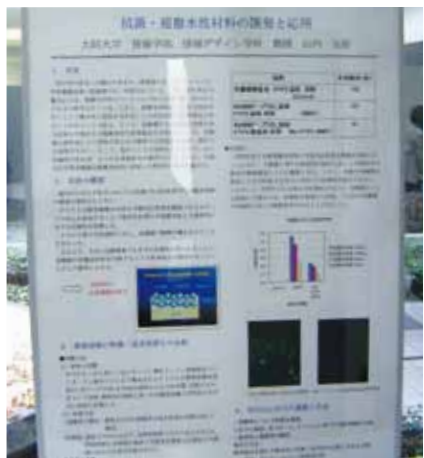
JSTイノベーションプラザ東海の活動の一環として行われた「第3回東海ニューテクノフォーラム」。

研究シーズ発表会で佐藤教授と山内教授がそれぞれの最近の研究シーズを発表しました。発表は簡単なプレゼンテーションの後、ポスターでの

発表です。

発表テーマは、佐藤教授が「形状記憶合金エンジンの開発」、山内教授は、「抗菌・超撥水性材料の開発と応用」です。

60人を越える参加者がプラザ東海の会議室に集まり、活発な質疑が行われました。



宇野享 教授（工学部 建築学科）
「ギフレク」トークイベントに
ゲスト出演

10月30日(土)・31日(日)、岐阜の大文化祭『ギフレク (GIFU ReCREATION 2010)』が開催されました。開催エリアは「岐阜市（を問わず岐阜県内ならば許容）を中心に参加者が自由に場所を設定し展開する」。イベントの規模の大きさがうかがえます。

30日(土)17時30分、メイン会場（岐阜駅北口駅前広場）で開かれた、Saturday Night Live Talk「Sha va da BAR (シャバダ・バー)」に GIFU Top Creator として招かれた宇野教授が Guest 出演しました。

(財)日本住宅・木材技術センター
理事長賞を受賞

数々の建築賞を受賞している、宇野教授設計の「幕張インターナショナルスクール」。

今回は「(財)日本住宅・木材技術センター理事長賞」を受賞しました。

これは、木造住宅産業の活性化、木造住宅の振興に貢献した企業・団体等に贈られる賞です。



井上孝司 教授（工学部 機械工学科）
「第11回特殊鋼
販売加工技士」
研修講座の講師を担当

(社)全日本特殊鋼流通協会名古屋支部主催「第11回特殊鋼販売加工技士」研修講座の講師を井上教授が務めました。

講座は東桜会館で開かれ、11月1日(月)・4日(木)・8日(月)・11日(木)・15日(月)・18日(木)の全6回(18:30-20:30)。

71人の参加者に機械図面の読み方と機械加工技術をレクチャーしました。



「技術シーズ発表会」で講演

11月25日(木)から27日(土)までの3日間、名古屋国際展示場ポートメッセなごやで「航空宇宙シンポジウム2010」が開催されました。

25日、交流センター内の会議室で中部地域航空宇宙関連産業集積活性化事業「技術シーズ発表会」が開かれ、井上教授が「スペースエイジ材料における機械加工」と題し、講演。

業界関係者でいっぱい会場に、本学卒業生榎原範之さんの姿がありました。総合切削工具メーカーのオーエスジー株式会社でドリルの設計・開発業務(航空機担当)に就いている榎原さんは、別の会場でブース展示のアテンド役をしていて、井上教授の講演があることを知り、駆けつけたとのこと。



「井上教授が発表されていた内容はまさに私が今取り組んでいる複合材や耐熱合金など航空宇宙産業界でメインになりつつある難削材についての発表でした。今後さらに増加することが予測されるこの材料の特徴、問題点、加工などの最先端技術を紹介されており、とても充実した時間を過ごすことができました。何より、井上教授が研究されている内容と、私が携わっている仕事と同じ分野ということに驚きと喜びを感じました。今回の展示会・セミナーで学んだことを最大限に生かし、今後お客様や大学研究の役に立てられるよう努力していきたいです。」と榎原さん、井上教授の講演終了後に笑顔で話してくれました。



▲榎原さん

鷺見哲也 准教授（工学部 都市環境デザイン学科）

「天白でいぷり平成22年度
第3回学習会」で講演

9月19日(日)、天白区在宅サービスセンター 研修室で「学習会」が開かれました。

今回のテーマは『突然のゲリラ豪雨に備える』。2008年岡崎や、2009年兵庫県佐用町で災害調査を行った鷺見准教授が講師を担当しました。

鷺見准教授は、『ゲリラ豪雨と天白区民の

役割』と題して講演。

参加した天白区の人たちに、短時間に局地的に襲う「ゲリラ豪雨」について、私たちにどうしてどのように厄介な存在なのか、それはどうしてなのか、そして、どんな対応・対策ができるのかなど、岡崎水害や佐用町豪雨の調査結果も交えて、説明しました。



大東憲二 教授
(工学部 都市環境デザイン学科)

土壌環境セミナー2010で
基調講演

10月14日(木)、メルパルクNAGOYAで土壌環境セミナー2010「必ず役立つ!法改正後の傾向と対策〜土地活用について、企業や経営者が今、知るべきこと、やっておくべきこと〜」が開催され、大東教授が基調講演しました。

今年の4月より改正土壌汚染対策法が施行され、“土壌汚染対策”に関する規制が強化・厳密化されました。そこで、3回目を迎える今回の土壌環境セミナーは、最新動向をよく知る現場の専門家を招き、開催。大東教授は、「法改正の実際、徹底検証」と題し、土壌汚染対策法と愛知県条例の改正のポイント、対策方法の変化や土地売買への影響などを解説しました。

光田恵 教授（情報学部 情報デザイン学科 かわりデザイン専攻）

戦略的連携支援事業
「Afternoon Seminar」で講座を担当

11月13日(土)、名古屋工業大学で、戦略的連携支援事業の一環として、高校生向けイベント「Afternoon Seminar」が開かれました。戦略的連携支援事業とは、文部科学省が、地域の大学間の積極的な連携を推進し、各大学における教育研究資源を有効的に活用することを目的としている取り組みです。

模擬授業を担当した大学は、本学・名古屋工業大学・愛知工業大学・豊田工業大学の4校。本学は、光田教授が「生活環境のにおい・かおり」と題し、身近なにおい・かおりについて、におい嗅ぎ体験を交えながらわかりやすく解説しました。また、におい分野の資格や職業などの紹介や、におい対策、かおりの活用についても説明しました。

「ハッ橋のにおいに驚いた」「コーラのにおいがわ

かった時は感動しました」「においが混ざって他のにおいを感じたことに驚いた」は参加した27人のアンケートから。

今回の体験型授業で、普段は意識しなかった「におい・かおり」分野について興味を持ったようです。



渡部裕子 講師（情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻）
個展「不可視」、開催しました

名古屋の栄にあるセントラルアートギャラリーにて、8月31日(火)から9月5日(日)まで個展を開催いたしました。

テーマは「不可視」。墨があしらわれていないところ、筆が舞った空間、動いたはずのその身体、その軌跡は必要があればだれでもその時に存在することができます。筆跡は単なる結果なのかもしれない、という無常な思いに身をまかせ、見えないものに思いを巡らせ、日々書き上げておりました。

それぞれの作品が触媒となり、皆さまが内包するさまざまな思いや考えが顔をのぞかせ、知られざる内面の琴線に触れますよう、また、より豊かな方向へといざなうきっかけとなりますよう、という思いを込め、今回の展示に至りました。

今回の個展は、新作16点(各サイズ700mm×1100mm)と立体書(立体物の側面に書を施したもの)の展示と、ビブラフォン奏者とのコラボレーションパフォーマンスをおこないました。パフォーマンスデーには、遠方からも多くの方が

見に来てくださり、半分以上の方はパフォーマンスを見ることのできないほどの人垣ができてしまい、申し訳ない限りです。

皆さまに支えられつつ作品制作がおこなえることに感謝し、今後もさらに深い作品創りができるよう精進していきたいと思っています。

(渡部裕子 記)



トコトン先生
大活躍!

渡邊慎一 准教授 (工学部 建築学科)

日本生気象学会大会で研究奨励賞を受賞

渡邊准教授は、11月5日(金)・6日(土)に文化女子大学で開催された「第49回 日本生気象学会大会」で研究奨励賞を受賞しました。生気象学とは、気象現象が人間をはじめとする生物に与える影響を研究する学問。医学、衛生学、気象学、工学、理学、生活学などの多様な分野の研究者が集まった学際的な学会。

今回受賞対象となった論文は、渡邊准教授が恩師でもある堀越哲美教授(名古屋工業大学)、富田明美教授(椋山女学園大学)と共にまとめた『屋外における熱的快適性評価のための着衣素材の日射吸収率の実測』。屋外において日射を受ける人体が、どの程度日射を吸収するかを定量的に示した。夏季における熱中症の評価や予防への貢献が期待されています。



▲渡邊准教授(左)



並木浩一 教授 (情報学部 情報デザイン学科 メディアデザイン専攻)

「インターナショナル・ヘラルド・トリビューン」
本紙記事にコメント掲載

「ニューヨーク・タイムズ」の傘下にある、世界11都市で印刷され、164カ国で発行されている「インターナショナル・ヘラルド・トリビューン(International Herald Tribune)」に並木教授のコメントが掲載されました。(11月25日木曜日)

この記事は世界的な人気を誇るカシオの腕時計『G-ショック』に関する日本発のレポート。

並木教授はプロダクト批評で知られ、特に腕時計評の著書が広く読まれていることから取材、コメントを求められました。

記事ではカシオ技術者らの開発秘話の一方、並木教授による「G-ショックは『繊細で美的』という時計の概念を覆したかつてない日本製品である」とする指摘を紹介。さらに「必要以上の技術的バーをあえて設定した腕時計が、

時にひとをサイエンス・フィクションの主人公になったかのように錯覚させる」という並木教授の評価で記事を締めくくっています。

この記事はニューヨーク・タイムズの web (http://www.nytimes.com) にも掲載。検索窓に『Daido University』とキーワードを入力することで記事がリンクされ、閲覧が可能です。

中島貴光 講師 (工学部 建築学科)

あいちトリエンナーレ・祝祭ウィークのフィナーレを
飾る舞台の美術デザインを担当

10月16日(土)・17日(日)の2日間、愛知県芸術劇場小ホールで開かれた「あいちトリエンナーレSAI-彩・祀・祭-」。舞台美術のデザイン(椅子や机兼花器など)を中島講師が担当しました。中島研究室の伊藤史哉さん(4年)、西村大地さん(4年)もサポート役として参加。

当日は愛知を拠点に活動する若手アーティストによる、“異色のコラボレーション”が実現。狂言・いけ花・バレエなど和と洋、各ジャンルの身体的・音楽的パフォーマンスを縦横無尽に絡め、ひとつの「祝祭のカタチ」を作り上げました。3回の公演はすべて大盛況、国内外からの観客およそ750人を魅了。あいちトリエンナーレ・祝祭ウィークのフィナーレを華やかに飾りました。



授業開発センター

最近の授業改善の取り組みについて

2001年度から始まりました研究授業／授業研究会(教員による授業参観と検討会)は、2010年度までの10年間で168回を数えました。2010年4月からは、専任教員の先生の2順目の研究授業もやることになりました。スタートのときに教授会で決定した「全教員の授業の公開の原則」「持続的な授業の改善と充実への努め」をキープレーズとする授業憲章に基づいた取り組みは続いているわけです。2010年度は、14回の実施のうち、専任教員の2順目の担当が6回、専任教員の初回が6回であり、2回を非常勤講師の先生が担当してくださいました。最近の授業研究会では、研究授業をしていただくだけでなく、カリキュラムのあり方、学科内および学科間の教授法・教授内容の連携といった

授業運営システムにまで議論が及ぶようになってきています。

このように回を重ねてきまして、授業研究会で繰り返し討論される授業方針・方法に係る重要な問題が浮かび上がってきました。そこで授業開発センターは、そのようなテーマを取り上げ、学内シンポジウムを企画・開催しています。2009年3月、2010年3月に第1回、第2回シンポジウムを行い、2011年2～3月に3回目を計画中です。取り上げられた(取り上げられる予定の)テーマは、次のとおりです。

第1回「学生に考えさせるか、覚えさせるか」

第2回「教えることにおける、「親切さ」の功罪」

第3回「学生が望む授業と教員が理想とする授業」(予定)

エコキャップ活動2010

現在、ペットボトルは年間およそ250億本が生産され、回収率は62%、再資源化率は37%で、残りは一般のゴミとして出されてしまっているのが現状です。一般のゴミに混ぜてしまうと、焼却処分されCO₂の発生源になったり、埋め立て処分され土壌汚染を引き起こす要因にもなります。そこで、ペットボトルキャップを分別回収し、そのリサイクル売却益から発展途上国の子どもたちにポリオワクチンを届けよう、と始まったのが「エコキャップ活動」です。

本学も昨年度より学内の25ヶ所にペットボトルキャップ回収箱を設置し、エコキャップ活動に務めています。

10月末、本学学生会執行委員会の協力を受け、1年間に回収したキャップをNPO法人エコキャップ推進協会に送付しました。今年度は、昨年の2倍となるおよそ49,200個(123kg)を回収! ワクチンにして子ども61.5人分、CO₂削減量にて387.45kgに相当します。2年目ということもあり、学生たちが分別している姿を目にすることも



何人かの教員に自らの教育実践をととして問題提起のプレゼンテーションをしていただき、その後参加者が討論を行うという運営スタイルです。本学の授業改善の現状を把握し、未来への発展に繋がる議論の場となればと願っていることでもあります。

以上は、大同大学の教員(非常勤講師の先生も含まれます)の授業改善への努力の一端です。他にも組織的な取り組みはありますし、教員個々のよりよい授業のための日々の研鑽もなされていることは言うまでもありません。



増え、学内の意識の高まりを嬉しく思います。これからも学生・教職員みんなで継続していきたいと思っています。

新刊書出版

『電気回路基礎』

編著者：佐藤義久 教授 (工学部 電気電子工学科)

著 者：神保睦子 教授 (工学部 電気電子工学科)

電気・電子・情報系学科の大学学部向けテキストシリーズ「新インターユニバーシティ」の一卷。佐藤教授が編者となり、電気関連学科における電気回路への入門コースとして最初に学習する教科書としてまとめ上げています。本書の第4章「キルヒホッフの法則」から第7章「直流回路の諸定理」までを神保教授、第8章「交流回路とは」から第12章「交流回路の電力と諸法則」までを佐藤教授が執筆しています。



出版社：オーム社
発行日：2010年8月
定 価：2415円(税込)

『電気回路Ⅱ』

編著者：佐藤義久 教授 (工学部 電気電子工学科)

電気・電子・情報系学科の大学学部向けテキストシリーズ「新インターユニバーシティ」の一卷。

『電気回路基礎』に続く後期2単位用の教科書となっています。過渡現象、回路網、各種フィルタなどの回路解析をわかりやすく解説しており、章末にはまとめと演習問題が充実。佐藤教授が編著者となり、第9章「回路網の性質と表現方法」、第10章「二端子対回路」を執筆しています。



出版社：オーム社
発行日：2010年8月
定 価：2415円(税込)

人 事

●採用[大 学] <事務職員>(H22.11.1) 稲垣 幸男 大学事務部 研究・産学連携支援室